

# 国連防災世界会議を終えて ～町医者である地域建設業の活動～

一般社団法人宮城県建設業協会  
いとう ひろひで  
 専務理事兼事務局長 伊藤 博英



## 第3回国連防災世界会議への 参加経緯

国際的な防災戦略を議論する国連主催の「第3回国連防災世界会議」が、仙台市において平成27年3月14日から18日までの期間に開催され、国連加盟の187ヵ国、国際機関、自治体、諸団体など国内外から延べ4万人以上の参加を見込んでおりましたが、一般向けのイベント・展示への参加者をあわせ来場者は約14万人と発表され、日本で過去に開催された国連会議の中でも最大級のものとなりました。

第1回が1994年に横浜で、第2回が2005年神戸で開催されたのに引き続き、仙台での開催となりましたが、2011年3月11日の未曾有の大災害となった「3.11東日本大震災」における仙台・東北の経験と教訓や防災、復興に関する枠組みを国内外に発信し共有することにより、世界の防災の取組の推進に貢献するとともに、東日本大震災を風化させることなく、防災意識をより向上させ、次世代に伝えていく契機とするため、また、何よりも、全世界・全国より受けた様々なご支援に対し、復興の過程を皆様方にご披露する機会となることから、このたびの仙台誘致につながったものであります。

この国連防災世界会議の開催にあたり、誘致をした仙台市より、当協会の仙台支部である（一

社）仙台建設業協会が、東日本大震災直後からの地域建設業が果たした役割を発信する機会であり、是非参加をすべきだとの要請を受け、最終的には県内全域を網羅し、組織として活動を展開してきた当協会本部として、開催期間中に仙台市内各所で一般の方も参加できるパブリック・フォーラムと防災展示に応募をすることと致しました。

仙台建設業協会は仙台市との間で災害協定を締結しており、東日本大震災発生直後より、道路啓開から遺体捜索、ガレキの撤去、応急復旧や解体作業等、協会組織をフル活用し、仙台市からの要請に対し全て応えた実績が評価され、地域を守る町医者である地域建設業で組織する協会との信頼関係、パートナーシップがより強固なものとなり、特に、ガレキの処理については、現場であらかじめ可燃物、不燃物、資源物に粗分類する「仙台方式」が効果を発揮し、仙台市が目標に定めた「発災から1年以内の撤去、3年以内の処理完了」を実現する等、そのような地域建設業の役割を正しく発信して欲しいとの関係部局からの要請でもありました。



## パブリック・フォーラムと 防災展示企画

東日本大震災における震災対応については、自衛隊・消防・警察の献身的な活動が、マスコミ報道等により広く一般に伝わり、子どもたちの将来

なりたい職業においても、この震災をきっかけに上位にランクアップする等、災害時にいち早く駆けつけ、救助あるいは人命を守る姿が映像を通して人々の脳裏に焼きついた一方で、地域建設業の震災直後からの対応が伝わっていない状況には、いち早く被災地への支援の道を啓くための活動等の映像がなかったことと、支援の道が道路啓開により啓かれた後になって初めてマスコミ等が入ることができ、その後の自衛隊・消防・警察等の活動の様子が映像として伝わっていった実態があります。

震災当初は、地域建設業として愛する地域や被災者の惨状を前にし、人員や資機材を有し技術力を持つ強みから、これまで経験したことのない様々な対応をまさに「何でも屋」となり24時間体制で必死の作業に取り組み、映像を撮りながら作業をしろというのは酷であるとの認識を持っておりましたが、時間の経過とともに、地域建設業の献身的な活動を伝えるためにも、映像の必要性・重要性をあらためて実感しております。

そのような経緯もあり、この国連防災世界会議において、震災直後からの地域建設業の活動を正しく発信し、地域のために地域とともに歩む「町医者」的な存在である地域建設業の今後の活動を一緒に考える機会ととらえ企画を検討して参りました。

パブリック・フォーラムでは様々な団体の活動の発表が予定され、数多くの建設関係団体の参加も予測されたことから、より一般の人々に参加をいただき、地域建設業の活動を発信するため、あまり専門的にならずに、広く一般の方々にわかりやすく伝えたい思いで、また、未来志向で考える視点を入れ、他団体と内容が重ならないこととし、地元一般紙である河北新報社の協賛のもとで進めたところであり、未来志向の部分では学生の参加をキーワードに致しました。

そこで、東北の大きな被災地である地元3新聞社（河北新報社、岩手日報社、福島民報社）が、震災から3年の経過で、ずれていく被災地と被災地以外との意識、状況。進む復興、進まない復

興。東北の「いま」を正しく見極め、東北の心に寄りそいながら震災の記憶と体験を伝える活動として、日本の未来を担う中学生の視点から、被災地の現状を日本全国に発信していく「スマイルとうほくプロジェクト」を展開しており、当協会主催で開催するシンポジウムにおいて、その「スマイルとうほくプロジェクト」と連携することで、さらに幅広い年代の生活者や子どもたちにこの記憶・想いを継承することと致しました。



### スマイルとうほくプロジェクト と地域建設業の活動

2013年度より活動が始まった「スマイルとうほくプロジェクト」の活動として、計10回、被災3県以外の全国の中学生45名が参加をした実績があり、当協会主催シンポジウムに向け、2014年度プロジェクトの活動において、被災地で復旧・復興事業に自ら被災者でありながらも携わる地域建設業の取組状況についても、全国の中学生に取材をしていただき、その体験の中に地域建設業も対象とすることで、地域建設業の視点も入れたシンポジウムでの発表につながるようお願い致しました。

その結果、7月21日に仙台市、10月12日に気仙沼市の2回の取材において、地域建設業の取材もスケジュールに組み込むことができ、仙台市では当協会理事・仙台建設業協会副会長の深松努が対応し座学形式で、震災直後より自衛隊・消防・警察等が被災地へ入る前の道路の啓開作業や、地域建設業の様々な震災対応と教訓について講演を行い、気仙沼市では気仙沼建設業青年会会長の小山堅などが対応し、漁港現場において震災直後からの対応並びに復旧状況を説明し、中学生からの取材に応えました。

その2回の地域建設業からの発信により、参加中学生の感想も、特に、真に迫っていたのが、津波被害の凄まじさと、たくさんの遺体と向き合わなければいけない苦痛。中学生記者たちが、思わず息を飲む瞬間が幾度もあり、また、道路を血管に例え、どこかで寸断されたら血液が循環しない

のと一緒に、道路が地元住民の生命線であるという言葉が印象に残ったようで、地域の地形・地象・実情を熟知する地域建設業の重要性を認識されたようでした。

なお、このプロジェクトのナビゲーターを務めるのが、お笑いタレント「ロザン」のお2人とフォトグラファーの安田菜津紀氏であり、被災地の取材体験をした中学生とともに、当協会主催シンポジウムへの参加をお願い致しました。



#### パブリック・フォーラム「未来に向けて」シンポジウム概要

地域建設業が東日本大震災の発災に即応して作業にあたった実態です。行政機関と連携して災害時に重要な機能を担う地域建設業の役割を震災時の事例をもとに振り返るとともに、これからの復興や減災への取組の方向を探るパネルディスカッションでの第1部と、多彩なイベントで応援する「スマイルとうほくプロジェクト」で全国からの中学生記者が被災地で学んだことを未来への提言として成果を発表する第2部の2部構成として、「未来に向けて～建設業が果たす役割・街づくりと中学生記者が考える防災～」シンポジウムを3月16日に東京エレクトロンホール宮城大ホールで開催し、当協会主催、共催に河北新報社並びにスマイルとうほくプロジェクト、協賛に(株)ニコンのもとで、地域建設業が果たす役割と被災地を見聞した中学生とともに防災・減災のあり方を未来志向で考える機会とし、広く一般に力強く発信致しました(写真一1)。



写真一1 シンポジウム満員会場

佐藤博俊会長の主催者挨拶のあと、震災直後からの協会組織並びに地域建設業として活動した道路啓開を中心として、沿岸部への支援等、応急対応を当協会編集作成した約15分程度のDVDを放映し、当時を振り返り、第1部「地域建設業が防災に果たす役割を探る～地域密着「町医者」としての建設業～」としてのパネルディスカッションに移りました。

パネリストには、国土交通副大臣・復興副大臣・内閣副大臣である地元衆議院議員 西村明宏氏、元国土交通事務次官で芝浦大学大学院客員教授 谷口博昭氏、地元地域建設業として、当時の当協会気仙沼支部長である(株)阿部伊組(南三陸町)代表取締役 阿部隆氏、女性の視点から、被災地である南三陸ホテル観洋女将 阿部憲子氏の4名に、河北新報社編集委員 寺島英弥氏をコーディネーターに迎えパネルディスカッションを行いました。

3テーマでディスカッションし、テーマ「復旧・復興に地域建設業が果たす役割」では、阿部隆氏より直後からの国道の緊急車両を通すための啓開作業、県道の整備、孤立集落のための迂回路を開く作業や燃料確保、最も過酷な水産加工物の処理や仮埋葬も地域建設業だから担ってきた実態の説明がありました。阿部憲子氏からは、自らの水産工場の被災状況、そのなかで地域建設業にいち早く駆けつけてもらい、道が開かれたお陰で三陸道へ至る道が確保され、命を守るライフラインとなったと説明がありました。谷口氏からは、国土交通省東北地方整備局の指揮系統のもと、災害協定に基づいた地域建設業との密な連携によってなされている日頃からの備え、反復訓練の成果であると説明がありました。西村氏からは、地域建設業が住民の安心安全を支える重要な役割を期待されており、「復興事業」や「復興道路」の整備等、地域建設業と密に連携した体制づくりに取り組んでいるとの説明がありました。

2つ目のテーマ「地域建設業の課題」においては、地域建設業の体力の低下により、スリム化を行った結果、対応においても戦力が低下していた



写真—2 シンポジウム第1部



写真—3 シンポジウム第2部

状況であったと分析し、災害時だけでなく、日頃から地域建設業が「地域の町医者」として役割を果たしているという認識が必要であり、国民が地域建設業に信頼を寄せることができる大きな見通しを示すことも大切で、若年者が定着する就労環境の整備と自分たちの役割をわかりやすくアピールしていくことが必要であるとの提言がなされました。

3つ目のテーマ「今後のあるべき姿」では、復旧・復興事業だけでなく、台風や水害等様々な災害対策や除雪作業も行うのが地域建設業であり、宮城県建設業協会が災害対策基本法に基づく宮城県の「指定地方公共機関」に指定され、これまでに以上に地域の期待に応え、地域に密着した「町医者」としての自覚を深め、地域の活性化を図る地方創生の担い手となる重要な役割があるとともに、今回の教訓として得られた技術や知識を継承し、広く共有するとともに発展の歩みを進めるべきであると提言されました（写真—2）。

第2部「写真で綴る、被災地の「いま」を伝えるプロジェクト～中学生記者による防災への提言～」では、ナビゲーターにロザンのお2人、フォトジャーナリストの安田奈津紀氏を迎え、スマイルとうほくプロジェクトに参加した中学生記者4人による実際に被災地を巡って得られた成果の発表を行い、それぞれの視点で撮影された写真とともに等身大で考える防災の大切さを会場に訴えました。

発表した中学生は、気仙沼市取材した滋賀県立命館守山中学校の正岡碧海さん、福島県郡山



写真—4 シンポジウム第2部

市・須賀川市取材した岩手県野田村立野田中学校の中村樹里さん、岩手県釜石市・大槌町取材した北海道札幌光星中学校の酒井崇光さん、福島県福島市・二本松市取材した宮城県大崎市立岩出山中学校の佐々木詩織さんの4名で、気仙沼建設業青年会の取材を体験した中学生も含まれており、「道路は地元住民の生命線」という言葉が特に印象に残っているとして発表しています（写真—3、4）。

今回の開催にあたって、地元一般紙である河北新報社の協力のもとで開催したことにより、一般への事前告知として、河北新報朝刊に3回、夕刊に2回、ウィークリー情報誌である河北ウィークリー仙台を初めとして、ホームページでの発信を行う等、一般の人々の目に触れる機会を数多く設定し、当日に建設関係シンポジウムが多数開催されているなかで、1,000名の参加を頂くことができ、うち500名が建設関係者、500名が一般参加者と多数のご来場となりました。そのなかでも、第2部において、タレントや中学生が登場したこと

により、多くの学生にも興味を持って参加いただきました。

当日の来場者アンケートの結果においても、第1部について、「地域建設業が携わった道路啓開から、水産加工物の処理、仮埋葬等の様々な震災対応をしている実態を初めて認識した」や「そのような実績をPRし今後につなげていって欲しい」等の意見が寄せられ、第2部では、「被災地を体験した中学生の防災減災に対する素晴らしい発想・発表に感動した」との意見が多数寄せられるとともに、「全国に伝えて欲しい」や「今後もこのような機会を設定し発信して欲しい」という開催に対して高評価をいただくことができました。

このシンポジウムの内容については、河北新報の4月8日付朝刊の見開きで採録30段フルカラー掲載をし、地域建設業の活動を広報発信しております。

## 5

### 防災展示の概要

国連防災世界会議の3月14日から3月18日の期間中5日間において、「せんだいメディアテーク」を会場とした防災展示に対し、パブリック・フォーラムとあわせ当協会でも展示ブースに申込み、「東日本大震災における未来へのメッセージ」として、東日本大震災における活動の様子を紹介するパネル展示や関係者の証言をまとめたドキュメンタリーDVDの再生、資料配付等を通じて、災害時における地域建設業の役割と防災への備えについてのメッセージを発信することと致しました



写真—5 メディアテーク展示

(写真—5)。

展示にあたり、多数の参加希望から展示スペースが1コマと小規模であるなかで、一般や学生等に対し、広く地域建設業の理解促進と魅力を発信する機会となるブース設営とするため、パネル展示は1枚として、国土交通省よりお声掛けをいただき、当協会と建設産業人材確保育成推進協議会の連名でパネルを作成し展示するとともに、パブリック・フォーラムの冒頭で放映した地域建設業の震災直後の活動や関係者の証言をまとめたドキュメンタリーDVDをエンドレスで再生することで、メッセージを発信致しました。

資料配付としては、当協会において、東日本大震災の経験や教訓を全国や後世に伝えるとともに、震災直後からいち早く現場に駆けつけ、これまで経験したことのない様々な震災対応について、地域建設業が果たした活動をまとめた記録誌「3.11宮城県建設業協会の闘い」第1弾を平成24年12月に発刊し、日々変わる復興への歩みを定期的に伝えるため、第2弾を平成26年3月、第3弾を平成27年1月にそれぞれ発刊しており、国連防災世界会議の開催にあわせ第1弾から第3弾までのダイジェスト版として、「宮城県建設業協会の闘い2011～2015—俺たちが被災地で経験したこと—」総集編を1万部作成致しました(写真—6, 7)。

また、代表作「ぼのぼの」やこの4月に封切りとなった「ジヌよさらば かむろば村へ」の原作となった「かむろば村へ」の原作者である宮城県出身の漫画家いがらしみきお氏に監修をお願い



写真—6 記録誌第1～3弾



写真—7 防災会議用に作成



写真—8 展示場その場で漫画本を見る学生

し、被災地沿岸部への支援の道路復旧を行った地域建設業の活動をまとめた震災漫画本「知られざる英雄たち」も発刊し、シンポジウム会場並びに防災展示するドキュメンタリーDVD、当協会PRパンフレット、防災グッズ（LEDライト）もあわせ配布を致しました。

さらに、国土交通省や（一財）建設業振興基金より、「現場に一番に駆けつけてくれたのは、地元の建設会社で働く人たちでした」というパンフレットや北海道建設業協会並びに京都府建設業協会で作成された建設業に関する漫画本等も資料提供をいただき、合計7点セットとして来場者に配布を致しました（写真—7）。

当協会のブースには5日間で延べ1,200名に来場いただき、資料を配付することができましたが、一般来場者や特に学生には漫画本が好評で、その場で一読している姿も見受けられ、地域建設業の活動を広く発信できたのではないかと実感しております（写真—8）。

## 6 最後に

今回の第3回国連防災会議への参加にあたり、我々がテーマにしたのはいかに一般の方々や将来の建設業の担い手となり得る学生等にわかりやすく、地域のために、地域とともに歩む地域建設業の活動を発信し、やりがいのあるものであることを伝えられるのかということでありました。

これまででも、戦略的広報をとということで地域建設業のPR活動の取組はしていたつもりではありますが、建設専門誌や建設関係機関に向かってのものがほとんどで、自己満足で終わってしまっていたのではないかと、東日本大震災時の広報のあり方、そして今回の国連防災会議におけるパブリック・フォーラム、防災展示を通じて、あらためて実感しております。

パブリック・フォーラムにおいても、これまで第1部のみの内容で、参加者も建設関係者が大半を占めるという企画になりがちなところを、地元一般紙を巻き込み、「未来へ」という視点で、中学生やタレントに参加をいただくことで、多くの一般の人々に興味をお持ち頂き、とかく関係者の専門的な内容になりがちな傾向をビジュアル的にわかりやすい言葉で伝えるということで、最後まで飽きることなく聴講いただき、結果的に地域建設業の活動を正しく伝えることができたと思われれます。

大震災以降の広報のあり方については、地域建設業が果たした当時の活動を正確に一般に伝えるため、地域建設業が奮闘する震災対応の写真を多用し、ビジュアル的に訴えられる極力文字を少なくし目を通していただくような記録誌として、「3.11東日本大震災/宮城県建設業協会の闘い」を作成し、建設関係者というよりは図書館や県内町内会を中心として配布をしたことにより、効果は絶大で、各方面より「地域建設業がそのような活動までしていたことは知らなかった」との感謝のお手紙等を頂戴することができました。そのことを踏まえ、地域建設業が大きな担い手となる日々

変わる復興への歩みを毎年まとめ、復興を遂げるまで発刊し続け、広く一般に配布しようと活動を展開して参りました。

このような活動を通して、広報ツールについて自分たちが作りたいものではなく、一般が望むニーズに応えるという視点に立つことの重要性を再認識し、この国連防災世界会議における展示での配布物としても、喜んで手に取って中身を見ていただくことができるかであり、そのことから震災対応の当時を振り返ってのドキュメントDVDや漫画本、当協会震災記録誌のダイジェスト版の作成ということになりました。

この配布物については、特に漫画本は現在も各方面より問合せをいただき好評を得ております。今後も様々な場面を通じながら、このようなツールを使って広報し続けることが重要であることから、協会組織としても引き続き広報活動に努めて参りたいと存じます。

昨年度より、あらたな試みとして、「中学生の体験型学習」や「お父さんの仕事場見学会」を東北地方整備局仙山河川国道事務所との共催で開催を始めております。これまで、学生を対象とした現場見学会は開催をしておりましたが、建設現場で働く者の家族を現場に迎えて自分の仕事を説明するという、身近なところから建設業に理解を示してもらおうという活動がありませんでした（写真—9）。

この開催を誰よりも喜んでいたのが、現場で働くお父さんたちでありました。本人も今まで建設現場に携わったなかで一番うれしかったとのコメントもありましたが、子どもたちや家族に対し、わかりやすく自分の現場の説明をする姿はとていきいきとしており、誇りを持って建設現場に従事していることが伝わっていました。勿論、家族や子どもたちも、作業している現場内に立ち入ったのは初めてのことであり、持っていたイメージとは違い、整然としている現場や最新技術による



写真—9 お父さんの仕事場見学会

情報化施工、UAV（マルチコプター）の活用等を駆使した現場施工や公共建造物の重要性等、現場で働くお父さんたちの偉大さを現場で体験することで、感想では「お父さんのように建設業の職業をやりたい」という嬉しい話も伺うことができました。

建設業で働く者一人一人が自分の仕事に誇りを持ち、仕事の内容を正しく説明できることが重要であり、まずは身内である家族から地域建設業の理解を得る説明、説得力を持った技術者・技能者・建設従事者であることが一番の広報活動になるのではないのでしょうか。各現場から建設業の誇りと魅力を発信していく、そのことが地域建設業の正しい理解促進活動につながっていくものと感じております。

このたびの第3回国連防災世界会議を経験し、地域建設業の活動を一般の方々にいかに伝えていくか、地域のために、地域とともに歩む地域建設業として、人々の生活が続く限り必要不可欠の産業であることを広報し続けて参りたいと存じます。

最後になりますが、第3回国連防災世界会議のパブリック・フォーラム並びに防災展示にご支援・ご協力賜りました関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。